環境事始　二十一帖　　環境研究最大の危機

～油断大敵火がぼうぼう～

加藤 龍夫著

環境研究は単に内容の難しさだけでなく人間の敵に攻められる困難さが特色と述べてきた。ところが、思わぬ方角から障害が発生、いや危急存亡の危機が起こった。攻撃どころか敗走する窮地に陥ったのである。それは研究室の火事である。正義の味方然として奮闘していたのが、一夜にして犯罪者側に転落となる体験を舐めさせられた。何の脈絡はないけれどこれも仕事の一環、面目ないことだが影響の重大性を語らぬわけにいかぬ。ある明け方けたたましい電話でたたき起こされた。花井からで研究室が出火という。飛んで行って見ると、消防車が取り巻き、室内は真っ黒に焼け爛れ、水浸しで、足の踏み場もない無残な状態。呆然として声も出ない。営々と苦心して集めた分析機器類は全てパー、書籍も研究資料も一切が灰燼と化した。大抵はこれで事業はジエンドとなるのだが、不幸中の幸い虎の子の GC-MS は別の部屋にあったから無傷だった。感傷にに耽っている暇はない。善後策を早急に立てねばならぬ。消防の検証が始まる。それより先に経過を確かめて置く必要がある。火元はオゾン$_3$自動分析装置で原因はすぐに判明した。数日前から東大疫学教室の前田教授に頼まれて、その性能試験運転をしていた。彼は中学の朋友で、大阪の紀本製作所製の装置がうまく作動するか検証してくれと預かっていたのが火を吹いたのである。中には反応用のエチレンを装着しているが、接続のふくろナットに亀裂がありエチレンが微量洩れた。運悪く換気扇が働かず、発火限界に達した時点でバルブ切替スイッチが入り、その火花が引火して爆発した。さらに室内のガス管が焼き切れて火の海となった。徹夜実験の学生が別室で仮眠していたが無事で人的被害はなかった。先生は責任者として警察に連行されて事情聴取を受けた。一世一代の演技だった。装置の欠陥を証言すれば会社が潰れるだろう。操作ミスを探せば誰が悪いか。また装置は東大のもので預けた方、預かった方の責任問題。そこで意を決して原因不明を言い通した。死活の瀬戸際だったので仕方がなかった。事後、東大とは一切関係ないとして欲しいと先方から話があったが、考えた挙句これはきっぱり断った。もしうちの研究室だけの不祥事となればどんな罰を受けるか分からない。東大と横国大では格が違うから、東大と一蓮托生であればこそそう酷い処置はないだろうととっさに思った弱者の知恵であった。かくて共に最も軽い戒告処分を受けた。研究室は二千万掛けて元通りに修復され何の傷痕も残さなかった。さすがは国である。国の政策については、環境問題では衝突することもしばしばであった。しかし権限は結局両刃の剣で悪用して水俣病を長引かせ、善用して脱硫対策を成功させた。つまり国の制度はおおむね良好でたまたま掌に当たった人間が問題となるだけと見るのが正解だろう。自らの失敗を通じて確かにそう思った。半休先生も世界をリードできる日本国の環境研究所を作るのが念願ではなかったか。だから火事が何らかの障害となったとしたら正に慙愧に耐えない。事件の後、会う人毎に謝って廻るのは適わないから床屋で丸坊主になって昂然と歩いた。この時県や自動車研から装置など見舞いに頂いた。困難の時に受けた好意は有難いものである。こうして大失策にも関らず自分の非行は棚上げにして、勧善懲悪の仕事を逡巡することはなかった。大難に直面して生来の勝手気ままの性癖が出た一幕。